

## 佳作

### 幸福のバトン

岩手県盛岡市立巻堀中学校

1年 吉田 明莉

響きわたる太鼓と笛とかねの音。「巻堀神楽」が行われる。そう思うと私はうれしくなる。

私が住んでいる地域に古くから受けつがれてきた、「巻堀神楽」というものがある。「巻堀神楽」は明治初年に神主であった工藤清等が盛岡大清水の多賀大明神の社風神楽を習得して興ったものである。この「巻堀神楽」は、毎年秋には秋祭り、冬にはどんと祭、年明けには門打ち巡行で披露する。

私がこの「巻堀神楽」に出会ったのは、小学1年生の時だ。私が通っていた小学校では、運動会や学習発表会で、伝承会のみなさんと「巻堀神楽」を地域の方々に披露している。その時はあまり神楽に興味がなかった。2年生の時に伝承会に入ってみないかとさそわれ、親に連れられて見に行ってみることにした。一生懸命踊っているお兄さんお姉さんを見ると、「私も入りたい」と思った。しかし、その頃、私はものすごい人見知りだった。そこにいてだけで足がガクガクし、常に心臓がバクバクしていたのを今でも覚えている。けれど、伝承会のみなさんはいつも優しく接してくれて私はすぐに打ちとけた。

そこへ新型コロナウイルス感染症が現れた。コロナを心配してなかなかお祭りで「巻堀神楽」を披露することができなくなった。そして昨年5月に新型コロナウイルス感染症が5類になり、また、お祭りなどで地域の方々に披露することができるようになった。秋には境内で久しぶりに地域の方々に「巻堀神楽」を披露することができた。冬のどんと祭では地域の方々に披露することはできなかったが、踊ることができてうれしかった。

そして年明け、この年明けに行う門打ち巡行に初めて参加した。これは家々を巡って舞い、その家の人の頭を権現様で噛んで身固めをするというものだ。この門打ち巡行は非常に体力のいるもので、歩く体力、舞う体力、肩に権現様をかつぐ体力とけっこうハードなのだ。だから若い人たちをできるだけ集めて行う必要がある。私も実際にやってみるとすごくきついことが分かった。特に「かたとう」では、常に権現様を持っていないといけないので、すごく痛い。冬だから雪と氷でツルツルすべり、しっかりふんばらなければいけないので足の筋肉もボロボロになる。そして舞も難しく、何度も何度も失敗してしまった。いつもは、やってもらった側だったので、やる側の世界に入るとその大変さが分かった。しかし、これはただただ大変なわけではない。この舞には「悪魔払い」

や「火伏せ」などの意味が込められている。私は地域の方々の頭を権現様で囃むたびに「幸福が訪れますように」と心の中で祈った。そうすると、どの家の人も「ありがとうございます」と言って笑顔を見せてくださった。すると私もなぜだか幸せな気持ちになった。そこでふと思い出した。アイオワ州立大学のジェンマイルらの研究に「他人の幸せを願うと自分も幸せになれる」というものがあったことを。私はまさにこれだと思った。このように権現舞にも良いことがあるということが分かった。この時、「巻堀神楽」が本当に好きになった。

「巻堀神楽」は、昔一度だけ途絶えそうになったことがあった。けれど、その危機は免れ、今日まで受けつがれている。この危機を免れることができた理由が私は分かった。私のように「巻堀神楽」で幸せを感じた人が、後世の人々にも感じてもらいたいという強い意思があったからだ。しかし、最近、「巻堀神楽」を伝承する人が減ってきている。地域の子どもが減り、体力が心配な高齢者が増えてきている。これは深刻な問題だ。この問題は解決できないかもしれないが、私は大好きな「巻堀神楽」をこれからも受けついでいこうと思う。

私には5歳の妹がいる。もう少しで小学1年生になる。そうしたら妹にも「巻堀神楽」を踊ってほしい。そして誰かの笑顔で身近にある幸せに気づき、誰かの幸福を願える人になってほしい。そしてまた誰かにそれを伝えてほしい。

9月には秋祭りがあるが、私は部活で行けないかもしれない。このようなことがこれから増えてくると思う。けれど都合が合う時には積極的に参加したい。

「巻堀神楽」で笑顔になった人の顔をエネルギーにして、これからも「巻堀神楽」を大切に受けついでいきたい。